

## 多音字について

矢澤 秀昭

### はじめに

漢字の読音は日本においても中国においても「一字一音」とは限らない。日本語では呉音、漢音、唐音といった伝来した時期や地方を反映している読音があり、漢字一字に対して複数の読音があることは常の如しである。漢字発祥の中国では、中国語（ここでは現代中国語の標準語である「普通話」を指す）においてももちろん呉音、漢音、唐音などによる読音の違いは無い。しかし、「破読（或いは破音）」という一字多音の現象がある。例えば、「好」は「你好」の場合は声調が第三声「hǎo」であり、「好奇」の場合は声調が第四声「hào」となる。これは前者が形容詞（「良い」の意）、後者が動詞（「好む」の意）と品詞の違いにより読み分けられている。このような声調によって品詞が異なる例は、「教」（第一声「jiāo」は動詞「教える」。第四声「jiào」は名詞「教え」）などある。また、声調のみならず、声母（子音）、韻母（漢字音の声母以外の部分を指す。例えば「钱 qián」の「q」は声母、「i a n」が韻母）が異なるものもある。

### 差

差不多	chà bu duō	声母 ch	韻母 a	声調 第四声
差別	chā bié	声母 ch	韻母 a	声調 第一声
出差	chū chāi	声母 ch	韻母 ai	声調 第一声
参差	cēn cī	声母 c	韻母 i	声調 第一声

他にも「長」や「還」など多音字は多く存在する。

中国語の「破読」は多くの場合それによって意味が異なる。則ちその一字が多義多音であることを示しているのである。多義多音の例は中古漢語にも見られる。『広韻』<sup>1)</sup>の例を挙げると

便	房連切 <sup>2)</sup>	辯也、僻也、安也
	婢面切	利也

など、多義多音の例は果たして多く存在する。

多音字は多義多音の他に「同義意読」の例もある。例えば「落」は「luò」、  
「lào」とどちらの発音でも「落ちる」の意である。同義意読の例は『広韻』  
にも見られる。

打	徳冷切	擊也
	都挺切	擊也

多義多音であれ同義意読であれ多音字は古来より存在していた。ここでは特に現代中国語の同義意読の多音字について考察をしてみる。

## 北方官話入声韻消滅

中国では唐以後政治の中心が北方に移って、北方の言葉が重要視されるようになった。元に到って北方方言に通じていなければ、政治的な活動が困難になり、清に到って遂に北方方言を「官話」（標準語）とした。

現代でも、1950年代から漢族及び他少数民族共通の公用語として北京方言を基礎とした現代の北京官話とも言うべき「普通話」が推進されてきた。

中国は広大でありそこに56もの多数の民族が居住する。漢族が90パーセ

ント以上を占める。漢族は古来より漢字を使用し続けているが、その文字の意味は古今東西によってさほど大きな変化はない。これは中国古典の「漢文」が現代の日本人でも読めることを以てしても理解できる。発音は年代や地域によって大きく異なる。「韻書」は詩歌を作成するために標準となる「発音」を記したものである。「韻書」が各時代に編纂されたことは時代によって漢字読音が異なることを示している。

普通話は無論、字体、語彙、文法、発音が統一されている。しかし、漢族の言語を広義に「漢語」とした場合、同じ漢語でも地方によってこれらの要素が異なる場合も少なくない。殊に発音において顕著である。特に南北間にその差異が大きい。

北方官話が他の地方漢語に比して大きく変化し、発音の相違が同義意読の例が生じた一要因と考えられる。

では、北方と南方の漢字音の相違はどこにおいて顕著であろうか。〔-m〕韻尾の〔-n〕韻尾への移行とともに、入声の他三声への派入が最も大きな相違点と考えられる。ここでは入声の他三声派入、つまり入声韻尾〔-p、-t、-k〕の脱落に注目してみたい。現代の方言区における入声韻尾の状況と中古音の入声韻尾とを比較すると大体以下のようになる。

表 1<sup>3)</sup>

方言区	中古入声韻尾	- p	- t	- k
北京		-○	-○	-○
濟南		-○	-○	-○
西安		-○	-○	-○
太原		-?	-?	-?
漢口		-○	-○	-○
成都		-○	-○	-○
揚州		-?	-?	-?
蘇州		-?	-?	-?
温州		-○	-○	-○
長沙		-○	-○	-○
双峰		-○	-○	-○
南昌		- t	- t	- k、- t

梅県	- p、- t	- t、- p	- k、- t
広州	- p、- t	- t	- k、- t
厦門	- p、- t、- ?	- t、- k	- k
潮州	- p、- ?	- k、- ?	- k、- ?
福州	- ?	- ?	- ?

南方においては入声韻尾は消滅せず、[- p、- t、- k] の韻尾は比較的明確に保存されている。北上するに従ってその別は曖昧となり、韻尾は喉頭閉塞音 [- ?] に集約され、北京などの北方地域において入声は調類としてそのものがなくなり、その韻尾も自然消滅している。この現象は北方音の歴史に酷似している。中古音においては入声は存在し、その韻尾の別も明確であった。元の『中原音韻』<sup>4)</sup>に到ると所謂「入声派入三声」ということで入声そのものが消滅したとされている。

## 読音と語音

『中原音韻』とあまり時間を隔てない『古今韻会』<sup>5)</sup>(『中原音韻』より約二十年前)には依然として入声は独立して項目がたてられている。だがその収める韻尾は『広韻』とはかなり様相を異にしている。『古今韻会』の入声韻目とその韻目に属する韻字を挙げてみる。

表2

一 屋	穀 芻
二 沃	穀 芻
三 覚	郭 各
四 質	吉 訖 聿 櫛 国 橘 芻 穀
五 勿	穀 訖 芻
六 月	厥 訖 怛 結 玦 穀
七 曷	葛 括 怛
八 黠	戛 怛 刮 訖
九 屑	結 訖 玦 厥
十 葉	脚 爵 郭 嬰 各
十一 陌	格 斡 額 訖 聿 国
十二 錫	吉 橘 漚 黑 克

十三	職	訖	国	洫	黒	克
十四	緝	訖	櫛			
十五	合	葛	予			
十六	葉	訖	結			
十七	洽	夏	怛			

この表から『古今韻会』の入声韻尾の別はもはや明確でないと推測できる。『洪武正韻』<sup>6)</sup>に到ると入声韻尾はすべて喉頭閉塞音に集約される。

この北方音における入声韻尾の消滅が多音字現象に少なからず影響したと考えられる。なぜなら、『国音字典』<sup>7)</sup>には同義異読として「語音」(口語音)と「読音」(読書音)を示している字例がある。その漢字の約半数が入声を由来とするものである。そのなかでも大半が『広韻』の韻目で麦、職、徳、鐸、葉、屋、陌、覚、燭、昔韻に属していたものである。則ち、入声韻尾[-k]を収めていたものに集中している。これは注目すべき点である。ここに『国音字典』から、中古音において入声韻尾[-k]を収めていて「読音」と「語音」の別がある字例を挙げる。

表3

字例	読音	語音	読音	語音
黒			hè	hēi
勒			lè	lēi
肋			lè	lēi
賊			zé	zéi
北			bò	běi
色			sè	shāi
摘			zhé	zhāi
宅			zhè	zhái
窄			zhé	zhāi
鐸			zhé	zhái
塞			sè	sāi
脈			mò	mài
麦			mò	mài
白			bó	bái
百			bó	bái
柏			bó	bái
勺			shuò	sháo
芍			shuò	sháo

字例	読音	語音	読音	語音
落		luò		lào
烙		luò		lào
酪		luò		lào
鑿		zuò		záo
剥		bō		bāo
雹		bó		báo
薄		bó		báo
殼		ké		qiào
嚼		jué		jiáo
角		jué		jiǎo
脚		jué		jiǎo
業		yuè		yào
鎗		yuè		yào
瘧		yuè		yào
熟		shú		shóu
軸		zhú		zhóu
粥		zhú		zhóu
肉		rù		ròu
六		lù		liù
緑		lù		lǜ
隔		ké		jiē
縮		sù		suō

普通話語音において韻母〔-ei〕の来源は、二種類に分けられる。一つは、中古音において合口呼一等韻<sup>8)</sup>と三等韻の非入声字であった（飛、背、費、雷、毎、配など）もの。一つは、表3にあるが如き中古音において入声字であったものである。同様のことが〔-ai〕韻母や〔-ou〕韻母にも見られる。この入声韻尾が単に脱落するのではなく、〔-i〕や〔-u〕などの新しい韻尾を生成していることが大きく読音と語音の同義意読の多音化を起こした要因と考えられる。中古音において〔-p〕、〔-t〕の韻尾を収める入声字は、その脱落変化に新しく韻尾を生成していない。

入声韻尾〔-k〕の〔-i〕、〔-u〕などの韻尾の代替変化（語音化）と脱落変化（読音化）とは、いずれが漢字音の変遷上主流であろうか。これは、代替変化（語音化）を以て主流とみなすべきが妥当であろう。何故か、例えば『広韻』の陌韻に属する字は三等韻を除く開口呼のものは、『中

原音韻』では皆来韻に帰入し、麦韻に属するものは殆どが皆来韻に帰入しているのである。また、上古より中古に到る字例のなかにも同様のことが見られる。例えば<sup>9)</sup>、

画 y wek → y wai  
 暴 b'uk → b'uau  
 告 kuok → kau

などの字例がある。では、現代に到り〔-k〕韻尾入声字は何故読音化と語音化の二つの過程が存在するのであろうか。表2から、『古今韻会』の緝、合、葉、洽韻の中古音において〔-p〕韻尾を有していたものは〔-t〕韻尾の入声に吸収されている。これは表1の方言区からも同様なことが見られる。則ち、〔-p、-t〕韻尾入声の変化形式はともに脱落変化のみであり故に合流したと考えられる。〔-p、-t、-k〕の入声韻尾が混沌としていた時代においても表3の字例は『古今韻会』では依然として〔-k〕韻尾を有する韻に属している(表4)。

表4

字例	古今韻会		
黒	迄得切	黒韻	
勒	歴徳切	克韻	
肋	歴徳切	克韻	
賊	疾則切	克韻	
北	必墨切	国韻	蒲妹切 媿韻
色	殺測切	克韻	
摘	陟革切	額韻	他歴切 訖韻
宅	直格切	額韻	
窄	側格切	額韻	
鐸	直格切	額韻	
塞	悉則切	克韻	先代切 蓋韻
脈	莫白切	額韻	
麦	莫白切	額韻	
白	薄陌切	額韻	

字例	古今韻会			
百	博陌切	額韻		
柏	博陌切	額韻		
勺	職略切	脚韻		
芍	職略切	脚韻	七約切	脚韻
	丁了切	皎韻	古了切	皎韻
落	歷各切	各韻		
烙	歷各切	各韻	各額切	額韻
酪	歷各切	各韻		
鑿	即各切	各韻	疾各切	各韻
	在到切	誥韻		
剥	北角切	各韻		
雹	弼角切	各韻		
薄	伯各切	各韻	白各切	各韻
殼	克角切	覺韻		
嚼	疾雀切	爵韻		
角	訖岳切	覺韻		
脚	許約切	脚韻		
菓	式灼說	脚韻	弋約切	脚韻
鑰	弋約切	脚韻		
瘧	逆約切	脚韻		
熟	神六切	菊韻		
軸	伯六切	菊韻		
粥	之六切	菊韻		
肉	而六切	菊韻	而由切	鳩韻
	九救切	救韻		
六	力竹切	菊韻		
綠	龍玉切	菊韻		
隔	各核切	格韻		
縮	所六切	菊韻		

読音と語音による同義意読の多音字は、その多くは中古音において〔-k〕韻尾入声の脱落変化と代替変化に由来する。

## 注

- 1) 韻書。『大宋重修廣韻』の略。1008年、宋の陳彭年等の勅撰。
- 2) 「房連切」は反切による表音法。「房」は声母を表し（この際「房」の声母のみ採用、韻母は含まない）、「連」は韻母を表す（この際「連」の韻母のみ採用、声母は関係しない）。
- 3) 「表3」は『漢語方音字彙』（北京大学中国語言文学系語言学教室編 文字



- 改革出版社 1989年)により作成。
- 4) 韻書。元(1324年)の周德清著。
  - 5) 韻書。元(1297年)の黄公紹著。しかしこれは既に散逸しており、黄公紹と同郷の熊忠が顕した『古今韻会举要』を使用。
  - 6) 韻書。明(1375年)の楽韶鳳、宋濂等の勅撰。
  - 7) 1912年に中華民国が成立し、1913年に漢字の読み方を定めるため「読音統一会」招集された。ここで北京官話を標準とし、6500字余りに「国音」が決定され、1919年に『国音字典』が出版された。
  - 8) 等呼。中国の伝統的な音韻学の術語。韻母)を分類するために使われた。母音部分が唇をすばめる合口呼(ごうこうこ)で始まるか、唇をすばめない開口呼(かいこうこ)で始まるかによって二つに分類し、さらに細かく口の開き方の違いによってそれぞれ一等韻・二等韻・三等韻・四等韻の四等に分けた。
  - 9) 『漢語史稿・上冊』(王力著 科学出版社 1958年)第十四節 上古促音韻母發展、一 ak、ok、ək、ek的發展、二 əuk、auk、的發展 参照。